

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

古市憲寿 著

『絶望の国の幸福な若者たち』

(2011年 講談社)

内向きなのは大人か若者か

世間はこう言う。「今の若者は気の毒だ」。せっかく大学をでて就職できるのは6割程度。それも短期契約だったり、契約社員だったり。都会はフリーターであふれ、地方の商店街はシャッター通りに変わった。おまけに年々増え続ける老人を支えるために、今の若者は多額の年金資金を払わされている。やがて自分たちが歳をとった時には、年金制度など崩れていて、誰も支えてくれない。まるまる支払い損になる危険度が高い。世間では「オレオレ詐欺」がはやっているが、これは「年老いた祖父が、孫のクレジットカードを勝手に使っている“ワシワシ詐欺”のようなもの」。「それなのになぜ日本の若者はもっと声をあげないのだ」と外国人記者はいぶかり、抗議運動を起こせとけしかける。

ところが26歳のこの社会学者は「とんでもない。今の若者はいちばん幸せなのだ」と答える。その証拠は、例えば内閣府の行ってきた生活満足度調査。これによると現在の20歳代の満足度が過去40年間でいちばん高いのだそうだ。今では20歳代の7割が今の生活に満足している。これに対していちばん満足度が低いのが50歳代の「お父さん世代」。だから著者は言う。「一つの企業だけで働き、出世レースに明け暮れて、趣味といえばゴルフとマージャンくらいしか知らないお父さんのほうが、はるかに内向きだ」。

お父さん世代が若かったころは、『何でも見てやろう』とか『深夜特急』といった本を抱えて、世界に飛び出していた。ところが今では、これだけ円高になったのに、海外留学したがる若者が減ったと大人たちは嘆く。お父さん世代にとっては、車はあこがれの的だった。同窓会最大の話は誰が一番先に自家用車を手に入れるかだった時代もあった。ところが最近の若者は、車も買わない。だいたい買いたがらない。そこで今の若者は行



動性・積極性に欠けるという「若者バッシング」が連呼されることになる。

ところが著者は、こうした「おとなの立てる若者論」に次々と反論してゆく。お父さん世代は「4畳半一間の下宿」に住み、せっけんをカタカタ鳴らせながら「横丁の風呂屋」に通ったではないか。しかし今の若者たちは「格好の良いバスつきワンルーム・マンション」に住み、携帯電話、インターネットを使って友達同士で仲良く付き合っている。「無縁社会」は老人の話で、若者は若者同士の「村」をしっかりと作っている。いったいどこが「気の毒」だというのか。そういうお父さんたちの方が、よほど不幸だったではないか。

逆説から現代の若者の実像を焙り出す

著者には『希望難民ご一行様』というルポルタージュがある。これもまた「コンビニに行けば何でもある。ないのは希望だけ」という現代の若者たちの「希望探し」の世界一周クルーズのドキュメント。若者から希望を奪った世の中に、なぜ怒り、蜂起しないのかとハッパをかける大人世代に、こう答える。「そういう大きなことは、誰かがやってくれる。どんな時代でもエリートがいるから」。そして今から100年も昔の超巨匠の一節を引用して、締めくくっている。

それがあまりにもパロディとしてぴったりはまっているので、ついつい原文を歪曲しているのではないかと疑ったが、権威ある日本語訳そのまま。このように本書の戦略は、年長者の言い分を次々に逆転させながら、現代の若者の実像を焙り出そうという手法。だから「戦争が起こっても、みんなが逃げたしまえば戦争にならないと思う」という。若いことは途方もない特権だが、使ったとたんに蒸発してしまうもの…といたいところだが、これも年寄りのヒガミとパロディ化されかねない。古代から現代にいたるまで、大人世代は言い続ける。「最近の若者は何を考えているのか、さっぱりわからない」。